

『洛中洛外図屏風』歴博甲本にみえる内裏とその行事 近藤好和

The Imperial Palace and its Events as Seen in the Rekihaku Kohon “Folding Screens of Scenes In and Around Kyoto”

KONDO Yoshikazu

はじめに

①装束

②立つ場所

③一人

おわりに

【論文要旨】

近年の研究で大永五年（一五二五）の制作であることが解明された、国立歴史民俗博物館所蔵の『洛中洛外図屏風』歴博甲本（以下、「甲本」とする）の右隻第五扇・第六扇には、当時の内裏である土御門内裏が描かれ、その紫宸殿前には男子の正装である束帯姿の公卿と考えられる人物が一名立っている。これはなんらかの行事の場面と考えられる。

『洛中洛外図屏風』の右隻第五扇・第六扇は正月から二月の場面であり、第五扇に渡るが、その行事は正月行事であるに相違ない。しかし、従来、それが何の行事であるかの研究はなされてこなかったし、甲本の内裏そのものの研究もほとんどなされて

こなかった。

そこで、本稿では、その人物の装束である束帯、内裏内の立つ位置、さらに一人で立つ、という三要素を各章に分けて詳細に分析し、甲本の正月行事が、正月節会（そのうちの特に元日節会）の内弁謝座の場面を描いたということ考察した。併せて、甲本の内裏に描かれている建物・施設について、文献や指図から判明する実際の土御門内裏、および甲本と同じく初期『洛中洛外図屏風』と一括される東博模本・上杉本の内裏の建物・施設との詳細な校合を試みた。

【キーワード】洛中洛外図屏風、束帯、土御門内裏、正月節会

はじめに

本館所蔵の『洛中洛外図屏風』歴博甲本（以下、「甲本」とする）は、多数の作品がある『洛中洛外図屏風』のうち現存最古のものとして知られているが、近年の小島道裕氏の研究によって、制作年代は大永五年（一五二五）、制作者は狩野元信、注文主は細川高国であることが解明された。⁽¹⁾

小島説の論点は、左隻第一扇に描かれている幕府（柳の御所）と、さらに横（南）に一列に描かれている両細川邸（典厩邸・京兆邸）を軸とするものであり、小島説に対して特に異論はなく、むしろ積極的に支持するものである。

ただし、小島氏の考察の対象は左隻中心に展開し、右隻の場面にはふれることが少ない。特に右隻第五扇・第六扇には「たいりさま」（内裏様）と付箋があるように、内裏が描かれ、何らかの行事が行われている（図1）。この行事について、小島氏は、元日に行われる「小朝拝」という見解を示しているが根拠は示しておらず、また、内裏そのものについてもほとんどふれるところがない。

この内裏が描かれている場所は右隻の第五扇・第六扇であるから春の場面であり、第五扇に渡っているものの、その行事は正月行事と考えて間違いなからう。だからこそ小島氏も小朝拝という元日行事を提示されたわけだが、これまで甲本の内裏やその行事についての具体的な考察は、管見では行われていない。⁽²⁾そこで、本稿の課題は、甲本の内裏を分析し、その正月行事が何に該当するかを考察することにある。

ところで、甲本の内裏は、平安宮内にあった本来の内裏（以下、平安宮内裏）ではなく、土御門東洞院殿という里内裏である。⁽³⁾以下これを土御門内裏と呼称するが、甲本と同じく中世に遡る初期『洛中洛外図屏風』

と一括される作品として、東博模本・上杉本・歴博乙本（以下、乙本）が現存する。⁽⁴⁾これらに描かれている内裏もいずれも土御門内裏である。そして、甲本以外の内裏行事は画面から明瞭で、東博模本（図2）が三月三日の鶏合。⁽⁵⁾上杉本（図3）は「正月御せちへのてい」と記され、正月（元日）節会の立楽の場面。乙本（図4）は正月十八日の大三稊杖の場面である。⁽⁶⁾

これに対し、甲本では紫宸殿南庭に文官束帯姿の人物（以下、「人物」とする）一名が把笏して立つ（図5）。じつはこの「人物」の①装束（文官束帯）・②立つ場所（紫宸殿南庭）・③一人という三点の要素こそ、甲本の内裏正月行事が何であるかを解く鍵となる。

この三点から結論を先に言ってしまうと、甲本の内裏正月行事は、小朝拝ではなく、正月節会（元日節会、七日の白馬節会、十六日の踏歌節会の正月三節会のうち、特に元日節会）であり、そのうちの特に内弁謝座の場面がもつとも有力であると考えられる。以下、この結論を①装束・②立つ場所・③一人という三点それぞれから検証していく。

①装束

既述のように、「人物」の装束は文官束帯であり、その束帯の特徴から「人物」は公卿と考えられる。ここではまず正月節会参加者の装束が束帯であることを確認したい。

ところで、甲本が製作されたという大永五年（一五二五）までの正月節会の実施状況は、『続史愚抄』『実隆公記』『山科家礼記』『宣胤卿記』『二水記』等から確認できる。これらの史料によると、正月節会は文正二年（一四六七）を最後に中絶。延徳二年（一四九〇）に再興。それから明応六年（一四九七）まで連続して実施された。その後は文亀二年（一五〇二）・永正十四年・同十五年（一五一七・八）・大永二年（一五二二）



図4 乙本に見える内裏『洛中洛外図屏風』歴博乙本(部分) 国立歴史民俗博物館蔵



図5 甲本に見える紫宸殿前『洛中洛外図屏風』歴博甲本(部分) 国立歴史民俗博物館蔵

く大永四年（一五二四）と実施され、大永五年には停止となったが、大永六年（一五二六）には実施された。⁽⁷⁾

上記各史料のうち正月節会当日（元日・七日・十六日）の節会参加者や参内した者の装束が記されているのは、『実隆公記』『山科家礼記』『二水記』であるが、この三史料からその装束と人物および節会参加の有無をまとめると以下ようになる。

○『実隆公記』

・延徳二年正月一日条……実隆―束帯（「装束」とある）。参加（外弁諸卿）。
・延徳二年正月七日条……実隆―衣冠。不参加。

正親町三条実望―束帯（「装束」とある）。参加予定（藏人頭として）。ただし、足利義政逝去のために節会停止。

・延徳二年正月十六日条……実隆―衣冠。不参加（節会見物）。
・延徳三年正月一日条……実隆―束帯（「装束」とある）。参加（内弁）。
・延徳三年正月十六日条……実隆―衣冠。不参加（節会見物）。

実望―束帯。参加（藏人頭として）。

・明応二年正月一日条……実隆―衣冠。不参加（当番による参内）。
・明応二年正月七日条……実隆―衣冠。不参加。
・明応四年正月十六日条……実隆―束帯（「装束」とある）。参加（内弁）。
・明応六年正月七日条……実望―束帯。参加（外弁諸卿）。
・明応六年正月十六日条……中山宣親―束帯（記されている装束構成要素素から）。参加（内弁）。
・大永四年正月一日条……三条公頼―束帯（「物具」とある）。参加（内弁）。

○『山科家礼記』

・延徳三年正月一日条……山科言国―束帯。参加（外弁諸卿）。
・延徳四年正月一日条……山科言国―束帯。参加（外弁諸卿）。

○『二水記』

・永正十五年正月一日条……鷲尾隆康―衣冠。不参加（節会見物）。
・大永二年正月一日条……隆康―束帯。参加（外弁諸卿）。
・大永二年正月七日条……隆康―衣冠。不参加（節会見物）。
・大永二年正月十六日条……隆康―衣冠。不参加。

高倉範久―束帯。参加（少納言として）。

・大永三年正月一日条……隆康―衣冠。不参加（節会見物）。

三条西公条―束帯。参加（内弁）。

範久―束帯。参加（少納言として）。

・大永五年正月一日条……隆康―衣冠。節会停止。

・大永六年正月一日条……隆康―衣冠。不参加（節会見物）。

以上、必ずしも節会が行われた日の記事がすべて残っているわけではないが、内弁や外弁諸卿だけでなく藏人頭や少納言でも、節会参加者の装束は束帯、参内しても節会不参加者の装束は衣冠であることは明らかである。⁽⁸⁾

ちなみに、内弁は、節会参加公卿のうち節会全体の責任者となる上卿、外弁諸卿は内弁以外の節会参加公卿。内弁・外弁諸卿は節会において天皇から酒宴と禄を賜る立場にあるが、藏人頭や少納言の節会参加は、節会を進行するための職掌としての参加である。

このように内弁以下節会参加者の装束は束帯である。束帯は天皇以下男子の正装である。これは公家だけでなく武家を含む。その構成は、被り物・肌着・下着・上着・装身具・持ち物・履き物等の様々な要素から成り立っている。この構成要素には文官と武官の相違があり、さらにそれぞれに晴儀用（物具という）と日常用の区別があり、さらに見かけの様式はほぼ変わらないが、下着等の表に現れない部分で時代的な変化があった。

上記史料のうち『実隆公記』延徳三年正月一日条と明応四年正月十六

日条には、実隆自身が着用した束帯の構成要素が記されている。⁽⁹⁾それを肌着・下着・上着・装身具・持ち物・履き物の順に並べ直すと次のようになる。なお、両日条ともに被り物の記述がないが、束帯であれば冠であることは自明である。

・大帷・赤大口・単・表袴・下襲・裾・袍・有文巡方帯・金魚袋・飭劔
・平緒・笏(笏紙)・扇・浅沓・靴
・大帷・赤大口・袖単・表袴・下襲・裾・袍・有文巡方帯・魚袋・飭劔
・平緒・笏(笏紙)・靴

両者の相違は、単と袖単、前者に扇と浅沓が加わっている点だけである。⁽¹⁰⁾各構成要素を簡単に解説しよう。

大帷は肌着。肌着としての大帷の使用は室町時代に定着した。赤大口は肌袴。「赤」を付すのは、直垂等の肌袴である白大口(赤大口と構造が相違)との区別のため。

単または袖単から裾までが下着である。大帷と単は裏地の付かない同型の着衣であるが、大帷は布製、単は絹製である。袖単は大帷の袖と襟に単の生地を取り付けた、室町時代に成立した着衣である。表袴は束帯特有の四幅の切袴。表地は白、裏地は赤が原則である。

下襲と裾(「きよ」と音読)は本来は一体のもの。下襲は表袴の上に着用し、その特徴は開腋の後身が長寸である点で、裾が上着である袍の「スソ」(裾(きよ))と紛らわしいので片仮名表記)からはみ出した。裾の寸法は天皇以下身分の高い者ほど漸次長寸となったが、鎌倉時代以降は、下襲本体と裾が分離し、分離した裾を別裾といい、下襲の腰に結び付けた。「下襲」と「裾」(別裾)の並記はかかる時代的様式変化の反映である。

袍は既述のように上着。束帯の袍は位階ごとに定まった色(位色)があるので位袍という。

有文巡方帯から平緒が装身具である。有文巡方帯は、位袍の腰を束ね

る石帯。石帯に付設された飾座(鏑という)が方形で彫文様があるのを有文巡方帯といい、有文巡方帯は節会等の晴儀で公卿が用いる石帯である。魚袋は、石帯の右腰に垂下する魚形意匠の腰飾。晴儀で用い、公卿以上は金製である。飭劔は、こは儀仗の劔のうちもっとも正式な如法飭劔。平緒はその佩緒である。⁽¹¹⁾実隆は延徳二年・明応四年ともに権大納言で武官を兼務していない。劔の佩帯は勅授帯剣者だからである。一条兼良の『三節会次第』(詳細は第三章)によれば、正月節会内弁は勅授帯剣者であることが自明のこととなっている。

笏と扇が持ち物。笏紙とは、節会の式次第を記した紙。笏の内側(所持者側)に貼り(「押す」という)、内弁は笏紙に記された式次第を確認して節会を進行させた。『三節会次第』によれば、この笏紙の取り扱いも節会での内弁作法の一環である(詳細は第三章)。扇は束帯に限らず装束では必ず所持する。後者で記されていないのは単純な書き落としてあろう。

浅沓と靴は履き物。靴は束帯正式の履き物。浅沓は略儀である。節会参加者は浅沓で参内し、式次第途中で靴に履き替えた(詳細は第三章)。前者で両者が並記されているのはそのため。なお、束帯では必ず襪という靴下を着用した。記載がないのは、冠同様にやはり自明のことだからである。

以上を前提として、さらに身分の問題を加えて「人物」の装束(図5)をみると、垂纓の冠に黒の縫腋有欄の位袍で把笏し、表地白・裏地赤(スソからはみ出す)の表袴で長寸の白い裾を背後に引く。この冠・位袍・表袴・裾から「人物」の装束は束帯であり、しかも垂纓で縫腋有欄の位袍、さらに劔や弓箭を佩帯していない点から、文官である。ただし、その位袍の縫腋有欄の描写は、スソが短寸に過ぎ、かつ開腋無欄のようにもみえる曖昧な描写である。

ところで、装束は冬(旧暦十月・三月)と夏(旧暦四月・九月)に季

節区分し、この季節区分は束帯では位袍と下襲（裾）に現れる。つまりともに冬は袷、夏は薄物の一重で、下襲（裾）の色は、冬は表地白・裏地濃蘇芳の躑躅襲ね、夏は濃蘇芳が原則である。

一方、束帯では身分は冠・位袍・表袴・下襲（裾）に現れる。まず位袍の位色は、当時は四位以上が黒、五位が緋、六位が縹である。また冠と位袍は五位以上、表袴と下襲（裾）は公卿以上と禁色勅許の殿上人が有文となる。さらに公卿以上は裾が長寸である。

以上から「人物」の束帯の季節・身分を考えると、黒の位袍から四位以上となる。ただし、裾と表袴には文様のない無文の表現で、これによれば、「人物」は禁色不勅許の四位の殿上人となる。

しかし、禁色不勅許の四位の殿上人でも冠と位袍は有文だが、「人物」は位袍・冠ともに無文である。しかし、無文の冠や位袍では六位であり、位袍の色と矛盾する。そこで、「人物」の身分を考える要素として、位袍の色と冠・位袍が無文である点のどちらを重視するかの問題となるが、重視するのはやはり位袍の色であり、文様は略筆と考えるのが妥当であろう。略筆であれば、「人物」は四位以上の公卿の可能性が出てくる。

この点で傍証となるのが裾が長寸に描かれている点である。甲本では束帯姿は「人物」だけなので比較できないし、そもそも絵画表現のなかで寸法を詮索することは無意味かも知れないが、それにしても長寸の裾は、「人物」が公卿を想定して描かれた可能性が高くなる。なお、裾は白であるから冬装束で、正月場面であるから当然であるが、濃蘇芳の裏地は描かれていない。これも略筆と考えるべきであろう。

以上、「人物」の束帯は、縫腋有欄の位袍のスソの描写を含めて、略筆が多い不正確な描写といえる。したがって、装束からみた「人物」は、文官と考えることは妥当にしても、その身分は不確定要素が多い。しかし、位袍の色や裾の長さは公卿の要素を含み、「人物」が公卿を想定して描かれたと考えて誤りではないであろう。

②立つ場所

次いで土御門内裏と甲本の内裏の建物・施設についての分析を通して、「人物」が立つ場所について考える。

「人物」が立つ場所は既述のように土御門内裏紫宸殿南庭である。土御門内裏は、土御門大路北・東洞院大路東・正親町小路南・高倉小路西の地に所在したが、当初は上記敷地の北半分で、南半分には新長講堂があつて南側は土御門大路に面しておらず、また敷地内の建物も紫宸殿と清涼殿が一体という簡略なものであつた。それが応永八年（一四〇一）二月に焼亡し、翌応永九年十一月に再建されて後小松天皇の移徙行幸が行われた。その再建時に、南半分にあつた新長講堂分を接収して敷地が土御門大路まで拡張、敷地内の建物も紫宸殿と清涼殿が分離するなど規模が拡大された。

この応永九年再建の土御門内裏は、二条道忠（のち満基と改名）の『福照院関白記』応永九年（一四〇二）十一月十九日（後小松天皇移徙行幸当日）条に指図が記載されている。この指図を藤岡通夫氏がトレースしたのが図6であり、以下、これを応永内裏図とする。この図が土御門内裏焼亡時にその規模と施設を詳細に記した『康富記』嘉吉三年（一四四三）九月二十三日条（以下、『康富記』といえは当該条とする）の記述とよく一致することは、藤岡氏によって指摘され、また指図に基づく土御門内裏の解説もすでに藤岡氏によってなされているが、これを平安宮内裏（図7）と比較して根本的な相違点を指摘すると次のようになる。

まず敷地中央に内裏の主殿となる紫宸殿があり、その乾（北西）に清涼殿が位置する点は同様である。また、紫宸殿南庭の東側に日華門、西側に月華門がある点も同様である。しかし、それらの建物・施設の規模や構造は相違し、しかも公事の際に重要な役割を果たす陣座・軒廊・宜

陽殿等の建物・施設は、平安宮内裏ではみな紫宸殿東側に位置するのに対し、土御門内裏ではいずれも紫宸殿西側に位置する。つまり平安宮内裏では東側中心に公事が進行するのに対し、土御門内裏では西側中心に進行した。この内裏西側中心に公事が進行することを当時「西礼」といった。⁽²⁰⁾

また、陣座は、平安宮内裏では東西行だが、土御門内裏は南北行であり、軒廊も平安宮内裏では陣座南側(正面)にあったが、土御門内裏では陣座の東側である。

さらに平安宮内裏は南を正面とし、承明門とよぶ南門があり、その外に建礼門とよぶ外門がある。そして承明門内を内弁、門外を外弁として公事の場を分けた。しかし、土御門内裏は里内裏であるから土御門大路に面した南面には承明門に相当する南門はなく、東洞院大路に面した西側を正面とし、⁽²¹⁾内弁と外弁は月華門で分けた。⁽²²⁾

この応永九年再建の土御門内裏は、嘉吉三年(一四四三)九月に焼亡し、⁽²³⁾その後は幕府の財政難のために再建までに時間が掛かり、康正二年(一四五六)七月になってようやく後花園天皇の遷幸をみた。⁽²⁴⁾

しかし、その後起こった応仁の乱により、土御門内裏は焼失は免れたものの荒廃を窮めた。その復興は文明九年（一四七七）十一月から幕府によって始められたものの、その後の大風による諸門の倒壊なども加わって修理は一再ならず続いたが、永正十八年（一五二二）三月二十二日には、後柏原天皇の即位式が紫宸殿で行われた。⁽²⁶⁾つまり甲本が大永五年（一五二五）に成立したとすれば、その内裏は後柏原天皇の即位式から程ない時期の土御門内裏が描かれたことになる。

ところで、後柏原天皇の践祚は明応九年（一五〇〇）十月であるが、即位式は度々延引となり、践祚後二十二年も経つてようやく行われた。⁽²⁷⁾そのために、実際の即位式に先立って、即位式のための康正二年（二四五六）再建の土御門内裏指図が複数現存する。そのうち最古と考えられるのが、京都御所東山御文庫蔵の『土御門内裏指図』である。そ

の裏書によれば、万里小路秀房が永正十五年（一五一八）二月に中御門本を書写したものである。図8はそれをトレースした図であり、以下、これを永正内裏図とする。

康正二年再建の土御門内裏の指図は、永正内裏図をはじめいずれも紫宸殿と清涼殿を中心とした指図で、応永内裏図のような土御門内裏の全体像を記した指図はない。しかし、応永内裏図と永正内裏図を比較して、清涼殿内部の構造を除いては基本的な相違がなかったことは、すでにやはり藤岡通夫氏によって指摘されている。⁽³⁰⁾つまり甲本の内裏は、永正内裏図さらにいえば応永内裏図で検討可能ということになる。

図1は応永内裏図をもとに甲本の内裏にみえる建物・施設を比定したものであるが、以下、これをもとに甲本の内裏を検討する。その際には『康富記』や永正内裏図も参照しつつ、東博模本や上杉本の内裏についても合わせて言及する。土御門内裏は、後柏原天皇の即位式後は、元亀元年（一五七〇）の織田信長による大修理まで大きな手は加わっていない。⁽³¹⁾そこで、初期『洛中洛外図屏風』のうち信長による大修理以前に成立したと考えられる東博模本や上杉本の内裏も、甲本の内裏の比較対象になる。特に上杉本は建物・施設に名称を記しているために参考になる。⁽³²⁾

最初に甲本の内裏の全体像をみると、甲本は土御門内裏を北西方向からの鳥瞰図として描く。この点は東博模本も同様だが、上杉本は南西方向から描き、向きが相違する。⁽³⁴⁾

個別の建物・施設に移って、まず土御門内裏外郭の諸門をみると、応永内裏図によれば、西面に二門あり、その南は四足門、北は棟門である。ついで北面に二門あり、その西は上土門、東は薬医門であろうか。また東面に一門あり、西側北の棟門よりも大型に描くが同じく棟門である。

一方、『康富記』によれば、「西面有三門」、南者四足左衛門陣是也、北者唐門也、長橋局通也、北者上土門也、東者棟門也」とある。これを応永内裏図と比較すれば、西面南門は四足門、北門は上土門、東門は棟

門で一致するが、西面北門は、応永内裏図は棟門、『康富記』は唐門で齟齬する。

なお、『吉田家日次記』応永九年（一四〇二）十一月十九日条（『大日本史料』七編一五）によれば、「西面門二字（四脚）、東面門一字、北面一字」とあり、北面は一門。『康富記』にも北面は西門だけで東門は不記載。したがって、応永内裏図には北面に東西二門を描いているが、北面は西門一門だけであつた可能性もある。

ちなみに、西面南門はそれを警固する左衛門陣があることから土御門内裏の正門（永正内裏図でもこの門に「左衛門陣」と記す⁽³⁵⁾）、西面北門は長橋局に面していることから土御門内裏の通用門であつたと考えられる。⁽³⁶⁾なお、西面北門における応永内裏図と『康富記』の齟齬については、本稿では『康富記』の誤記とみなす。⁽³⁷⁾

これに対し、甲本では、西面二門・北面西門・東門が描かれ、門の種類は西面二門・東門は応永内裏図と同様であるが、北面西門は唐門である。これは東博模本も同様であるが、上杉本は西面南門は四足門ではなく棟門である。

なお、甲本・東博模本・上杉本いずれも西面北門は棟門である点から考えても、それを唐門とするのは『康富記』だけであるから、唐門は誤記と考えられる。ただし、北面西門は応永内裏図・『康富記』では上土門であるが、甲本・東博模本・上杉本いずれも唐門で齟齬する。応永内裏図・『康富記』がともに上土門であるため、それが正しいのであろうが、そうであれば、甲本・東博模本・上杉本いずれも唐門に描いた理由が問題となる。康正二年（一四五六）再建の際に変更があつたか。

さて、甲本では、西面南門の四足門は閉門しているが、西面北門の棟門は開門し、風折烏帽子・狩衣姿と立烏帽子・狩衣姿の人物二名が入るところである。また、北面西門の唐門からはともに風折烏帽子・狩衣姿の人物二名が出るところであり、東門は閉門している。

応永内裏図によれば、西面北門を入るとその正面に長橋がある。『康富記』でも「北者唐門也、長橋局通也」とある。この長橋（長橋局）が土御門内裏のいわば玄関に相当する。この長橋に続いて東西行の建物があり、応永内裏図には「対屋七間」と記すが、西対屋で、さらに渡殿を介してもう一棟の対屋（応永内裏図に名称不記載だが東対屋）が続く。この東西二棟の対屋が土御門内裏の後宮で、さらに東対屋の東にやはり渡殿を介して進物所がある。

長橋は甲本にも明瞭に描かれ、それは東博模本・上杉本でも同様で、上杉本では「車よせ」と記す。ただし、甲本の長橋は高床式ではない。東博模本も同様で、上杉本は高床式に描く。また二棟の対屋は、甲本では西対屋は明瞭だが、東対屋はほとんど霞に隠れ、進物所は描かれていない。東博模本も対屋は同様であるが、東対屋の東に屋根に腰屋根のある進物所を描く。進物所は土御門内裏のいわば台所で、換気のために腰屋根がある。これは上杉本に明瞭で、上杉本は対屋二棟分の屋根と腰屋根のある屋根を描き、後者に「台所」と記す。

ちなみに、甲本・東博模本・上杉本ともに建物・施設の屋根はいずれも檜皮葺の表現である。この点からも、甲本・東博模本・上杉本いずれもが、屋根を瓦葺とした信長の大修理以前の土御門内裏を描いたことがわかる。

応永内裏図によれば、西対屋の南に渡殿を介して清涼殿がある。甲本でも西対屋にほとんど隠れているが、その南に南北行の建物を描き、「せいりやうてん」の付箋を付す。

東博模本・上杉本も同じく対屋の南に南北行の建物を描き、東博模本は「大里様」の付箋を付け、上杉本は「清涼殿」と記す。

なお、応永内裏図によれば、西対屋と清涼殿は渡殿でつながっているが、甲本・東博模本・上杉本いずれも渡殿は描かれない。これは二棟の対屋の間と進物所の間でも同様で、初期『洛中洛外図屏風』の内裏は渡

殿が省略されている。

平安宮内裏の清涼殿は東を正面とし、これは土御門内裏でも同様である。平安宮内裏ではこの清涼殿正面の東庭には呉竹・河竹が植えられていたが、土御門内裏清涼殿東庭には桜が植えられていたらしい。⁽³⁸⁾土御門内裏を北西や南西から描く甲本・東博模本・上杉本はいずれも清涼殿東面（正面）はみえないが、東庭には桜の太木が描かれる。その桜は甲本は開花し、東博模本も同様であるが、上杉本は枯れ枝である。

応永内裏図・永正内裏図によれば、清涼殿南面は西側に突き出し、殿上（殿上間）となっている。平安宮内裏では、公卿・殿上人の詰め所である殿上間は清涼殿南廂に設置されていたが、土御門内裏では清涼殿南面西側に突き出す形で設置された。この殿上は、甲本には描かれていない。しかし、東博模本・上杉本にはともに描かれている。

また、東博模本・上杉本では清涼殿西面（裏面）に屋根が突き出している（前者は唐破風屋根）。これは応永内裏図・永正内裏図、および『康富記』に「以常御所之乾方為御末」、御末之南御湯殿之上敷」とあるのによれば、御末や御湯殿上に当たると考えられる。御末は宮中奉仕の侍女の詰め所、御湯殿上は内裏の風呂場に当たる御湯殿奉仕の女官の詰め所である。

応永内裏図によれば、土御門内裏の御湯殿は西対屋と清涼殿をつなぐ渡殿（清涼殿北廊）の南端にある（永正内裏図には清涼殿北廊以北は描かれてない⁽³⁹⁾）。なお、東博模本によれば、この御末・御湯殿上と殿上をつなぐ渡殿と考えられる屋根がみえるが、応永内裏図・永正内裏図ともに両者の間に渡殿はない。

これに対し、甲本では、殿上を描かず、御末・御湯殿上に相当する位置に三方を築地塀で囲った施設を描く。これと類似する施設を東博模本や上杉本に探すと、上杉本の殿上南側に描かれ、その中央に門があつて閉門している。永正内裏図によれば、殿上南面には「壁」が建ち並び、

その内側（北側）つまり殿上前庭を「小庭」とし、壁の中央には「無名門」がある。また、小庭の西側に神仙門がある。応永内裏図にも、名称は記されていないが、殿上南面に壁らしきものがあり、その途中に門がみえる。

つまり上杉本の施設は壁で囲われた小庭とその出入り口である無名門を描いたものと考えられ、甲本では、西対屋と殿上を混同したのか、殿上等を描かずに西対屋の南に小庭を囲う壁を描いたことになる。ちなみに平安宮内裏でも殿上間の前庭を小庭といい、その東面北側に右青瑱門、同南側に無名門があった。

応永内裏図・永正内裏図によれば、清涼殿の南東に紫宸殿があり、清涼殿と紫宸殿は長橋でつながる。『康富記』にも「清涼殿在紫宸殿之乾」とある。紫宸殿は内裏の正殿で、その南が広い庭であり、南庭または大庭という。

甲本・東博模本・上杉本では、いずれも清涼殿南東の位置に東西行の建物を描き、それが紫宸殿である。ただし、土御門内裏を北西方向から鳥瞰する甲本・東博模本では紫宸殿正面（南面）は描かれず、東博模本では鶏合を見る公卿等が座す紫宸殿背面が描かれているが、甲本では背面も明瞭に描かれていない。これに対して、南西方向から鳥瞰する上杉本では紫宸殿正面がみえ、南簀子に座して元日節会立衆を見る公卿等が描かれ、南階の上には階隠の屋根が突き出している。平安宮内裏紫宸殿にはこの階隠の屋根はない。土御門内裏の紫宸殿は、紫宸殿⁽⁴⁾といつても所詮は里内裏の寝殿に過ぎないからである。

紫宸殿南側の庭が南庭であり、平安宮内裏ではその西側に右近の橘、東側に左近の桜を植える。土御門内裏でも同様で、応永内裏図・永正内裏図・甲本・東博模本・上杉本すべてで確認できる。甲本の場合、橘は果実の描写はないが葉が青々と茂り、桜は開花している。しかし、旧暦とはいえ正月の描写であるから、写実的に描くならば、橘に果実が描か

れてしかるべきであるし、清涼殿東庭のそれと合わせて桜の開花は時期尚早である。その点、上杉本では橘は青々とした葉のなかに橙色で果実を描き、桜は清涼殿東庭ともに枯れ枝に描く。季節感としてはこちらが写実的である。なお、東博模本は甲本と同様の描写であるが、東博模本の内裏の季節は三月であるから、こちらはそれで写実的である。

さて、甲本ではこの紫宸殿南庭に「人物」が立つ。画面によれば、「人物」は紫宸殿に向かって正面を向いておらず、やや艮（北東）に向いて立つ（図5）。この点は、「人物」の行為を考えるためのひとつの注目点で、詳しくは次章で述べる。

平安宮内裏では、紫宸殿南庭東側には、北から宜陽殿・日華門・春興殿が南北に並び、宜陽殿と紫宸殿をつなぐ渡殿の北側に陣座、その南に軒廊がある。一方、紫宸殿南庭西側には、北から校書殿・月華門・安福殿が南北に並んだ（図7）。

これに対し、土御門内裏では、日華門・月華門の位置は平安宮内裏と同じである。しかし、既述のように、その南北の建物は相違し、応永内裏図・永正内裏図によれば、月華門では、ともに渡殿を介して、北に宜陽殿、南に御輿宿があり、さらに宜陽殿の北に陣座、その東に軒廊があつて紫宸殿とつながった。この点は『康富記』にも、

軒廊在^三南殿之西階^一也、陣座在^三軒廊之西^一、陣座之南有^三宜陽殿^一、陣与宜陽殿之間、有^三宣仁門^一、出^三入陣座^一之通路也、宜陽殿之西裏為^三床子座^一、宜陽殿之南、有^三月花門^一、其南西方有^三御輿宿^一、とあるのに一致する。

一方、日華門は、北に渡殿を介して春興殿があり、南は渡殿だけである。

甲本でも紫宸殿南庭東西に棟門を描く。西が月華門、東が日華門であり、ともに開門する。まず月華門からみると、その南北に接して建物を描き、北が宜陽殿、南が御輿宿と考えられる。しかし、そうであれば、

北は月華門と宜陽殿の間の渡殿は描かれず、また宜陽殿と紫宸殿西面との間は至近で、その間に建物・施設はなく、陣座や軒廊は描かれていないことになる。また南も、応永内裏図・永正内裏図によれば、御輿宿に続く渡殿の途中に左腋門があるが、この渡殿と左腋門は描かれていないことになる。

これは東博模本でも同様であるが、上杉本は相違する。まず月華門南側は甲本と同様で建物に「御輿宿」と記す。しかし、北側は渡殿を描き、「ちんの座」(陣座)と記し、この陣座と紫宸殿西面を渡殿でつなぎ、この渡殿が軒廊と考えられる。しかし、宜陽殿相当の建物はなく、宜陽殿は描かれていないことになる。なお、月華門と御輿宿の間の渡殿と左腋門が描かれていないのは甲本と同様である。

土御門内裏では月華門で内弁・外弁を分けることは既述したが、甲本の外弁には、黒の縫腋有欄の位袍に指貫を着用した衣冠姿、あるいは背後に畳んだ白い裾らしき描写があるので布袴姿とも考えられる人物を先頭とする男性一行を北側に、尼を先頭とする女性の一行を南側に描く。⁽⁴¹⁾

布袴・衣冠の位袍は縫腋有欄だけであり、布袴の位袍は束帯と同様、衣冠の位袍はごく一部に相違があるものの全体構造は同様である。この衣冠姿または布袴姿の男性の位袍は、スソがやや短寸であるものの縫腋有欄として構造的には正確な描写である。「人物」の位袍も縫腋有欄ならば、かかる描写でなければならない。

一方、日華門に移ると、甲本では南側に接して屋根を描く。これは南庭側が開放されており、建物ではなく渡殿を描いたものと考えられる。これに対し、北側は紫宸殿に隠れているが、門外に高床式の建物を描く。これが応永内裏図・永正内裏図とは位置がずれているが春興殿と考えられる。これに対し、東博模本では、日華門南側は建物を描き、北側も屋根の一部がのぞき、さらに門外北側に春興殿と考えられる建物を描く。

この春興殿は、土御門内裏では、三種の神器のうちの八咫鏡を安置す

る内侍所である。事実、『康富記』にも「日華門北腋有「内侍所御殿」とあり、⁽⁴²⁾また、一方、上杉本では、日華門南北に渡殿を描き、さらに北側の渡殿のはずれ、門外北側に高床式の建物を描いて「内侍所」の名称を記している。

さらに応永内裏図によれば、清涼殿の北東に黒戸があり、紫宸殿東・春興殿北に記録所があつて、記録所の北に隣接して小御所がある。『康富記』にも、「其北有「記録・小御所等」、其北有「泉殿」矣」、「御黒戸・常御所之北者対屋也」などとみえる。なお、前者冒頭の「其」は内侍所であり、泉殿の再建は応永十三年(一四〇六)三月なので、⁽⁴³⁾応永内裏図には描かれていない。また、「常御所」は清涼殿内の北側にあつた天皇日常の空間で、ここは清涼殿と同義であろう。

これらに相当する建物として、甲本では、紫宸殿東側に南北行の建物だけを描く。これは小御所と考えられるが、黒戸・記録所に相当する建物は描かれていない。これは東博模本でも同様であるが、東博模本では、紫宸殿と小御所をつなぐ渡殿の一部も描く。これに対し、上杉本では、内侍所の北に南北行の建物を二棟続けて描き、その南に「黒戸」北に「小御所」の名称を記している。永正内裏図には黒戸・小御所・記録所は描かれていないが、その別本には小御所と記録所が描かれているものがあり、⁽⁴⁴⁾それによれば、小御所の南は記録所であるから、上杉本の「黒戸」は記録所の間違いとだろう。

以上、応永内裏図・永正内裏図と照合すると、甲本・東博模本・上杉本の各内裏は必ずしも正確な描写とはいえない。そのなかでも、甲本よりも東博模本・上杉本の方が正確である。これに対し、甲本は、乙本に比較すればはるかに土御門内裏の構造を把握しているものの、⁽⁴⁵⁾もつとも不正確ということになる。

それにしても、「人物」が紫宸殿南庭に立っていることは明らかである。この点だけでも甲本の内裏正月行事を小朝拝とみる説は否定され

る。小朝拝は紫宸殿南庭ではなく、後述のように、清涼殿東庭で行われるものだからである。

③ 一人

これまで考察してきたように、「人物」は文官公卿で、紫宸殿南庭に一人で立つ。次にこのことが正月節会の内弁謝座の場面につながることを検証したい。

改めていえば、正月節会は元日節会、七日の白馬節会、十六日の踏歌節会の三節会である。甲本成立当時もこの正月三節会は朝廷にとって重要な行事で、上杉本がそうであるように、『洛中洛外図屏風』に内裏正月行事として描かれるに相応しい。

正月三節会の式次第は基本的部分では同様であるが、相違点もある。たとえば上杉本に描かれている立案は、元日・踏歌の両節会にあつて白馬節会にはないため、上杉本の正月節会は元日節会か踏歌節会のどちらかとなる。しかし、本稿で注目する内弁謝座は正月三節会いずれにもあり、甲本の内裏正月行事が内弁謝座であれば、正月三節会いずれでも該当する。とはいえ、基本はやはり元日節会で、特別な事情がない限り、元日節会を描いたと考えるのが自然であろう。

そこで、元日節会の式次第を追うが、依拠する文献は『三節会次第』である。これは土御門内裏での正月三節会の式次第（特に内弁作法）を詳細に記した儀式書である。その奥書に「以て後成恩寺禪閣自筆本⁽⁴⁶⁾写留之、最可^レ為^二有職之指南^一者乎、⁽⁴⁷⁾ 峯延徳第四曆孟夏下澣」とあるように、原本は「後成恩寺禪閣」つまり一条兼良の自筆。それを延徳四年（一四九二）「孟夏下澣」（四月下旬）に書写したという。

『三節会次第』によれば、内弁は、まず元日午刻に束帯で参内する⁽⁴⁷⁾。その束帯の構成要素に「飾劔」と「平緒」があり、内弁が勅授帯劔者で

あることが自明のこととなっている。ところが、「人物」は帯劔しておらず、画面による限りは勅授帯劔者ではない。なお、内弁は一上つまり左大臣が務めるのが建前である。

次いで参内した内弁は「殿上」（清涼殿）に堂上・着座し、諸卿もそれに従う。そこではまず小朝拝となる。このように小朝拝は清涼殿で行うもので、ここから甲本の内裏正月行事が小朝拝でないことが明らかとなる。

次いで内弁及び諸卿は陣座に移動し、諸司奏・外任奏等の諸事処理。なお、白馬節会ではここで叙位関係の諸事も加わる。なお、この陣座に移動する際に、一上（左大臣）である内弁は、陣座南の宣仁門外（永正内裏図参照）で、隨身か六位外記に笏に笏紙を押させる（予め笏紙を押した笏と交換する方法も）。

次いで内弁を除く諸卿は、土御門内裏宜陽殿西側の床子座前方に立つ立部南側（永正内裏図参照）で、浅沓から靴に履き替え、外弁（月華門外。平安宮内裏ならば承明門外）へ移動。ここで天皇が「南殿」（紫宸殿）に現れて御帳台内の御椅子に着座すると併行し、内弁は、浅沓から靴に履き替え、同時に一上でない内弁はここで笏紙を押し、宜陽殿に移動して兀子に着座した。

やがて「内侍臨^二西檻^一」む。これは内侍（勾当内侍）が紫宸殿西側の簀子の欄干際に現れることで、天皇の準備が整った合図。「内侍臨西檻」は天皇の準備が整ったことを示す慣用句である。なお、これが平安宮内裏であれば「内侍臨^二東檻^一」で、本来はこちらが正しい。土御門内裏は宜陽殿が紫宸殿西側にあるために「西檻」となった。

次いでいよいよ内弁謝座に移る。内弁は宜陽殿から軒廊を経て紫宸殿南庭に向かい、そこで謝座する。謝座とは紫宸殿に座を賜ることを天皇に謝することである。紫宸殿南庭においての謝座の作法は、『三節会次第』によれば、

到_二右杖南頭_一（去_レ南一許尺、進_レ東一許尺）、尚立_二東面_一一揖、立直向_レ良（中略）再拜（先突_二左膝_一、起時右膝）、乍向_レ良一揖、というものである（へ）内は割書。以下同じ）。

つまり内弁は「右杖」つまり紫宸殿南階左右（東西）に着座する出居の近衛次将のうち西側の次将の前に、南・東とも一尺ほど離れた位置に東面して立ち、まず一揖。次いで良に向き直って再拜し（この再拜が厳密に言えば謝座）、良を向いたまま再び一揖。これが一連の謝座の作法である。⁽⁴⁸⁾

これはすべて内弁一人で行うことで、「人物」はまさにこの謝座を行う内弁であると考えられる。より具体的には、『三節会次第』に「再拜（先突_二左膝_一、起時右膝）」とあるように、再拜とは膝を突いて跪く拝礼を二度繰り返すことである。しかも、「人物」は紫宸殿の正面に北面して立たず、良を向いて立つ状態に描かれている（図5）。これをそのまま受け取れば、「人物」の状態は、再拜前の「立直向良」いた状態、再拜での一度目の拝礼と二度目の拝礼の途中、再拜後の「乍向良一揖」した状態のいずれかということになる。

謝座の後に内弁は紫宸殿に堂上・着座し、月華門（平安宮内裏ならば承明門）の開門を命じる。つまり謝座の間は月華門は閉門し、また月華門外の外弁には諸卿が待機する。しかし、甲本では月華門は開門し、門外に諸卿は不在である。節会参加の諸卿の装束は束帯であり、甲本で月華門外にみえる衣冠あるいは布袴を着用していると考えられる人物は、外弁諸卿とは無関係である。

『三節会次第』にみえる元日節会式次第のうち、「人物」に関わる必要な部分はここまでである。しかし、以下の式次第も続けてみていこう。

月華門開門後、内弁は外弁諸卿の参入を命じ、諸卿が南庭に列立。外弁諸卿による謝座に続き、外弁上卿による謝酒がある。謝酒は、酒を賜ることを天皇に謝することである。その後、諸卿も堂上・着座して酒宴

に移る。

なお、白馬節会では、酒宴の前に叙位があり、ついで白馬が南庭を渡る。叙位がない年もあるが、白馬は必ず渡るため、正月七日の節会を白馬節会というのである。

『三節会次第』によれば、酒宴は、天皇へ御膳、臣下に餽飽、天皇へ鮑羹・御飯・進物所御菜・御厨子所御菜、臣下に飯汁と続く。次いで天皇へ三節御酒と一献、臣下に一献。次いで国栖奏、天皇へ二献、臣下に二献。次いで御酒勅使、天皇へ三献、臣下に三献と続く。

そして三献後に立楽となる。立楽とは、近衛府の楽人・舞人が行う舞楽のうち、楽人が立って演奏するものをいう。上杉本でも楽人は立って演奏する。なお、白馬節会では、この立楽が内教坊の楽人・舞妓による女楽となり、踏歌節会では、立楽の後に女楽が行われた。したがって、立楽を描く上杉本の正月節会は白馬節会ではありえず、元日節会か踏歌節会となり、一般論から元日節会の方が蓋然性が高いことになる。

立楽後、内弁は下殿し、陣座で宣命と見参を確認。ついで堂上して天皇に宣命・見参を奏聞後に復座。宣命は内弁に返され、内弁は宣命を宣命使となる参議に手渡す。ついで宣命使に続いて内弁以下諸卿も下殿して南庭に列立。宣命使が宣命宣制後、内弁以下諸卿は一旦堂上・復座してから下殿。月華門下（平安宮内裏では承明門下）で禄を賜って退出した。以上が元日節会の式次第である。

おわりに―問題点と課題

以上の考察のように、甲本の内裏正月行事は、元日節会内弁謝座の場面である可能性が高い。しかし、そう考えるにはいくつかの問題点や今後考えるべき課題も残る。

まず本稿冒頭で紹介した小島説との齟齬がある。小島氏は、甲本の製

作年代を大永五年（一五二五）とし、また、「人物」を関白二条尹房と想定した。⁽⁴⁹⁾ 想定根拠は、画面の二条邸に主人とおぼしき人物が不在であるからである。

しかし、『統史愚抄』大永五年正月一日条によれば、「節会等臨期被_レ停_レ之、依_二用_一途事也」とあり、大永五年の元日節会は「用途事」つまり費用不足で直前に停止になった。甲本の内裏正月行事が元日節会内弁謝座であるとしても、それは大永五年のそれではないということになる。そこで、大永五年は元日節会が停止になったにも関わらず、何故描いたのが問題となろう。

もともと永禄三年（一五六〇）～天正五年（一五七七）は、元日節会はまったく行われていない。⁽⁵⁰⁾ しかし、永禄八年に成立したという上杉本⁽⁵¹⁾には元日節会立案が描かれている。つまり上杉本の元日節会立案は、永禄八年に現実に行われた行事を描いたのではなく、元日節会立案が内裏正月行事としてもっとも相応しいと判断されたためと考えられる。甲本の場合も同様に考えてよいであろう。

とはいえ、「人物」は二条尹房ではありえない。なぜならば、大永五年で尹房は関白だからである。⁽⁵²⁾ 関白は内弁や陣定の上卿を務めることはできない。上卿を務めることができるのは、一上である左大臣を筆頭に右大臣・内大臣・大納言・中納言・近衛大将である。⁽⁵³⁾

応永二年（一三九五）踏歌節会では関白一条経嗣（『統史愚抄』同年正月十六日条）、大永六年元日節会では関白近衛植家（『統史愚抄』『実隆公記』各同年正月一日条）が内弁を務めた。しかし、経嗣は左大臣、植家は右大臣を兼任する。⁽⁵⁴⁾ つまり経嗣・植家はそれぞれ左大臣・右大臣の立場で内弁を務め、関白として務めたのではない。これに対し、尹房は大臣を兼任しない関白で、内弁を務めることはできない。

ただし、これらは甲本の内裏正月行事それ自体に直接関わる問題ではない。直接関わる問題は、内弁謝座の場面であるならば、その時点で実

際には月華門は閉門し、諸卿が門外の外弁に待機していなければならぬ点である。しかし、甲本では月華門は開門し、門外に諸卿の待機もない。

一方、元日節会で内弁謝座のほかには諸卿が紫宸殿南庭に立つ機会は、外弁諸卿謝座、外弁上卿謝酒、宣命宣制の三場面がある。この三場面ではいずれも月華門は開門し、門外に諸卿は不在である。そこで「人物」が一人で立っていることよりも、月華門が開門して外弁に諸卿が不在である点を重視すると、「人物」は謝座や謝酒を行う外弁上卿、または宣命を読む宣命使の可能性も出てくる。ただし、いずれの場合もそれぞれの背後に列立する諸卿のほかに、謝酒の場合は空盞を持つ御酒正、⁽⁵⁵⁾ 宣命使ならば手にする宣命等が略筆されたことになる。

さらに、内弁謝座の場面をはじめ節会の間は、紫宸殿南階東西に出居の近衛次将が着座していなければならない。この出居の次将は上杉本には描かれている。しかし、甲本では南階前に肩衣袴姿の武士が着座する（図5）。肩衣袴は烏帽子を被らない露頂を本義とする装束で、かかる姿で天皇御前である紫宸殿南階前に控えることは、いくら当時とはいえあり得ない。⁽⁵⁶⁾

かかる描写態度は、「人物」の位袍の描き方や帯剣していない点、また土御門内裏の建物・施設の描写等とも共通し、甲本の内裏描写は、装束・建物・施設・行事すべてにわたって概ねの様子を把握しているだけで、細部は不正確ということになる。これに対し、上杉本の方がすべてにわたって正確度は高い。つまりそれは甲本の注文主や作者が、装束・行事を含めて内裏（朝廷）についての詳しい知識を持っていなかったからであろう。

とはいえ、甲本の内裏正月行事は、元日節会内弁謝座の場面の可能性が高いという一応の見解は提示しておきたい。

註

- (1) 「洛中洛外図屏風歴博甲本の成立と初期洛中洛外図諸本」(『国立歴史民俗博物館研究報告』一四五、二〇〇八年)、「描かれた戦国の京都 洛中洛外図屏風を読む」(吉川弘文館、二〇〇九年)。
- (2) 甲本の内裏については、東博模本・上杉本を含めて堀口捨己「洛中洛外図屏風の建築的研究―室町時代の住居考」(『画論』一八、一九四三年、のち『書院造りと数寄屋造りの研究』(鹿島出版会、一九七八年)再録)がある程度である。
- (3) 里内裏は里第・里亭・里内等ともいい、村上天皇の天徳四年(九六〇)九月に平安宮内裏が初めて焼亡し、天皇が後院である冷泉院に仮居したことを濫觴とし、後醍醐天皇の時代までに様々な変遷があった。特に後堀河天皇の嘉祿三年(一二二七)四月に再建途中の平安宮内裏が焼亡すると(『明月記』「民経記」『百鍊抄』各同年四月二十二日条)、以後は内裏といえは里内裏だけとなった。元弘元年(一二三二)九月、元弘の乱により京都を脱出した後醍醐天皇に替わり幕府が擁立した光厳天皇が土御門東洞院殿で踐祚(『統史愚抄』同年九月二十日条)。その後、建武新政権を経て、延元元年(一二三六)八月に踐祚した北朝の光明天皇が、翌年九月に土御門東洞院殿に遷幸(『統史愚抄』同年九月二十日条)。以後、後小松天皇までの北朝歴代天皇は土御門東洞院殿を内裏とした。明徳三年(一二三二)閏十月に南北朝が合一してからも、後小松天皇は土御門東洞院殿に居住し、以後、近世を経て明治維新で東京遷都するまで、土御門東洞院殿(つまり土御門内裏)は規模を大幅に拡大しつつ内裏であり続けた。平安宮内裏・土御門内裏その他里内裏以来の前史を含む江戸幕末におよぶ京都御所研究の集大成として藤岡通夫『京都御所』(中央公論美術出版、一九八七年(新訂)、彰国社、一九五六年(初版))があり、土御門内裏の基礎研究はこれに尽くされる。本稿における土御門内裏についての記述はこの書にもつばら依拠する。なお、管見では、土御門内裏の研究としては、川上貢『日本中世住宅の研究』(中央公論美術出版、二〇〇二年(新訂版)、墨水書房、一九六七年(初版))があり、古くは和田英松「後柏原天皇即位指図に就いて」(『史学雑誌』二六・一三、一九一五年のち『国史国文の研究』(雄山閣、一九二六年)収録)や奥野高廣「戦国時代に於ける皇居の研究」(『国史学』十一、一九三三年、のち『皇室御経済史の研究後編』(畝傍書房、一九四四年)のち国書刊行会、一九八二年復刻)収録)もある。また、里内裏の沿革については、橋本義彦「里内裏沿革考」(山中裕編『平安時代の歴史と文学 歴史篇』吉川弘文館、一九八一年、のち『平安貴族』(平凡社、一九八六年)再録)があり、南北朝期以前の土御門東洞院殿についてもふれている。
- (4) 註(1)前掲書の小島氏の整理によれば、それぞれの制作年代・制作者・注文

- 主は次のようである。まず東博模本の原本(現在所在不明)は、天文十二(一五五二)年(二五四三(四四))をあまり下らない頃、狩野元信周辺、細川晴元関係。乙本は天正八年(一五八〇)以降、狩野松栄・宗秀周辺、不明ながら非権力者という。また、上杉本は、黒田日出男『謎解き洛中洛外図』(岩波新書、一九九六年)の研究により、永祿八年(一五六五)、狩野永徳、足利義輝で、上杉謙信に宛てたことが通説化している。なお、現存していないが、『実隆公記』永正三年(一五〇六)十二月二十二日条によれば、越前の朝倉貞景が土佐光信に「京中」を描いた屏風を新調させたことが知られ、これを朝倉本とよんで、甲本に先行する最古の『洛中洛外図屏風』と考えられている。東博模本・朝倉本については、小島道裕「洛中洛外図屏風『東博模本』の成立事情および『朝倉本』に関する研究」(『総研大文化科学研究』五、二〇〇九年)も参照。
- (5) 東博模本は、右隻第六扇に幕府(花の御所)を描き、第五扇は欠損し、第四扇、季節でいえば三月に相当する部分に内裏を描く。しかし、当時の内裏では三月には特筆すべき行事もなく、そこで本来は民間で行われていた行事で、当時は内裏でも行われた鶏合を描く。
 - (6) 乙本の内裏正月行事については、杉山美絵「描かれた禁裏の記憶―洛中洛外図屏風(国立歴史民俗博物館乙本)―」(日高薫・小島道裕編『歴史研究の最前線 一 美術資料に歴史を読む―漆器と洛中洛外図―』総研大日本歴史研究専攻・国立歴史民俗博物館、二〇〇九年)参照。
 - (7) 各史料から確認できる正月節会が行われた年次を具体的に示せば次のようになる。『統史愚抄』は実施年すべて。『実隆公記』は、延徳二年・三年・明応二年・四年・六年・大永四年。『山科家礼記』は、延徳三年・四年。『宣風卿記』は、永正十四年・十五年。『二水記』は、永正十四年・十五年・大永二年・大永三年である。ただし、『宣風卿記』には過去の実施状況も記されており、文正二年・延徳二年・四年・明応五年・文亀二年の実施が確認できる。なお、大永六年までの実施状況のうち、正月節会のうち元日節会が停止された年はないが、白馬節会と踏歌節会は停止された年もある。その点の詳細は割愛する。
 - (8) 『実隆公記』延徳三年正月十六日条によれば、直衣で当日の踏歌節会を見物した前関白九条政基が非難されている。かつて足利義持が直衣で節会を見物しようとした際に問題となり、一条兼良等の意見で衣冠に替えたという。当時、節会見物の装束は雑袍勅許を得ている者でも衣冠が原則であったらしい。
 - (9) 『実隆公記』延徳二年正月一日条・明応六年正月十六日条、『山科家礼記』延徳三年正月一日条・同四年正月一日条、『二水記』大永二年正月一日条にも、節会参加者の束帯構成要素の一部は記されている。なお、各史料によれば、かかる束帯の構成要素は、すべてが自身の所有ではなく、自身の所有はその一部で、要素ごとに他人と貸し借りを行っている。当時、束帯が日常的に着用するものではな

く、特別な時にだけ着用する装束となったことが明らかである。

- (10) 当該期の束帯構成要素各具の詳細は、一条兼良の『桃花葉』、三条西実隆の『装束抄』等参照。また、束帯全般についての詳細は、鈴木敬三「解説」(國學院大学神道資料展示室編『高倉家調進控 装束職文集成』國學院大学、一九八三年)、同編『有識故実大辞典』(吉川弘文館、一九九六年)「束帯」等関連項目(すべて同氏執筆)、近藤好和『装束の日本史』平安貴族は何を着ていたのか(平凡社新書、二〇〇七年)等参照。

- (11) 『実隆公記』明応四年正月十六日条によれば、平緒について「以上自内府申請之、可著紫淡之處、賜紺地之間、今夜宴不_レ用紫淡、雖_レ無念臨期無力者也、凡今夜公卿皆用紺地無念事歟」とみえる。これは『桃花葉』によれば、紫綵平緒は節会_レ用で、紺地平緒は尋常用だからである。ただし、『装束抄』では、紺地も節会に用いるとある。

- (12) 『統史愚抄』光明院上巻「御所」および「康富記」嘉吉三年(一四四三)九月二十三日条等。なお、後者は、土御門内裏焼亡当日の記録で、土御門内裏の施設を詳細に記している。

- (13) (3) 前掲藤岡書・川上書・橋本論文等。

- (14) 『統史愚抄』同年二月二十八日条。

- (15) 『福照院関白記』『吉田家日記』(『大日本史料』七編一五・「兼宣公記」『統史愚抄』各同年十一月十九日条。

- (16) 『迎陽記』応永八年(一四〇二)八月三日条に「今日造内裏事始也、(中略)地形被_レ広_二南(長講堂分)一_一」とある。

- (17) 『福照院関白記』の指図は、『大日本史料』七編一五にも『福照院関白記』の本文とともに掲載されており、これが『国史大辞典4』『京都御所』(福山敏男執筆、吉川弘文館、一九八三年)に転載され、それがそのまま註(10)前掲『有識故実大辞典』『京都御所』にも転載された。しかし、この図が宮内庁書陵部蔵の原図とはやや相違することは、註(3)前掲奥野論文でもふれられ、また、註(3)前掲藤岡書では、具体的に紫宸殿桁行の間敷の相違が指摘された。つまり『大日本史料』掲載時のトレースの誤りと考えられる。これに対し、図6はその誤りを正した図で、註(3)前掲藤岡書より転載した。なお、藤岡書には、応永九年再建の土御門内裏の指図として、「応永十年元日節会指図」(宮内庁書陵部蔵)も掲載。これは元日節会を行う紫宸殿と内裏南西部のみの指図である。

- (18) 以上、註(3)前掲藤岡書。

- (19) 平安宮内裏の指図は、陽明文庫所蔵の「宮城図」を現存最古とし(「宮城図」の書名は近衛家熙の命名らしい)、ついで九条家本「延喜式」卷四十二所載の図があり、ほかに数種ある。陽明文庫本は、奥書によれば、「右筆頼円」という人物(出自未詳)が、元応元年(一二三九)八月三日に「鎌倉大蔵稲荷下足利上総

- 前司屋形」で模写したものである。また、平安宮内裏をはじめとする平安宮の研究は、裏松光世(固禪)の『大内裏図考証』(寛政九年(一七九七)幕府に献上)を基礎とするが、それに基づいて作図された平安宮内裏図が『大内裏図考証』とともに『故実叢書』(一八九九(一九〇六)年に収録され、それがそのまま『新訂増補故実叢書』(一九九三年)にも収録されている(『大内裏図考証』は二十六(二十八)平安宮内裏に關しては二七、平安宮内裏図は三十八収録)。これらはいずれも保元二年(一一五七)に藤原通憲(信西)のもとで再建された保元新造内裏の図で、図7をはじめ現在諸書に掲載されている平安宮内裏図は、いずれもこれらの図をもととしたものである。なお、平安宮内裏の指図については、(財)古代学協会・古代学研究所編『平安京提要』(特に第五部第三章「福原敏男」「平安京とその宮城の指図」、角川書店、一九九四年)、『陽明叢書記録文書編別輯 宮城図』(「解説」は村井康彦・瀧浪貞子両氏。思文閣出版、一九九六年)等参照。

- (20) 管見では、『吉田家日記』応永九年(一四〇二)十一月十九日条(『大日本史料』七編一五)、『建内記』応永三十五年(一四二八)正月七日条、および「三節会次第」元日節会等にみえる。

- (21) 『康富記』に「以西為_レ晴、(中略)為_二里内之間、南方無_レ門者也」とある。また、『吉田家日記』応永九年(一四〇二)十一月十九日条(『大日本史料』七編一五)にも「以_二東洞院面_一為_レ晴」とある。

- (22) この点は、たとえば『建内記』応永三十五年(一四二八)正月一日・七日条に、それぞれ元日節会・白馬節会の行事進行のなかで具体的に記されている。

- (23) 『康富記』『看聞日記』『統史愚抄』各嘉吉三年(一四四三)九月二十三日条。註(12)でもふれたように、もともと詳しいのが『康富記』である。

- (24) 『実隆公記』(管見記)所収・『統史愚抄』各康正二年(一四五六)七月二十日条。

- (25) 応仁の乱以降の土御門内裏の荒廃と修理の具体像については、註(3)前掲藤岡書・川上書・奥野論文参照。

- (26) 「二水記」『統史愚抄』各当日条。

- (27) 『統史愚抄』同年十月二十五日条。

- (28) すでに『統史愚抄』文龜元年(一一五〇)六月六日条に即位式の数年延引が記され、即位式直前では、「二水記」永正十六年(一一五九)十月十日条に即位式延期の記事がみえ、また同永正十七年七月十八日条によれば「来月二十七日御即位必定云々」とあるが、それも延期となつて、永正十八年三月二十二日によりやぐ行われた。

- (29) 『大日本史料』九編一八(永正十五年雜載)所収。図は東京大学史料編纂所が書写した『京都御所東山御文庫記録』より。原本の分類番号は勅封一六七函七番。この東山御文庫本の指図には類本が多く、註(3)前掲藤岡書には、その一本として「御即位庭上之図」(宮内庁書陵部蔵)を載せ、また、野宮家旧蔵で関東大

震災で焼失したという指図もあり、註(3)前掲和田論文はこの指図の解説である。また、註(3)前掲藤岡書には、これらとは別本の「御即位庭上之図」「旧御即位図」(ともに宮内庁書陵部蔵)も掲載する。

(30) 註(3)前掲藤岡書。

(31) 信長の修理は、大修理といっても主に建物・施設の屋根の瓦による葺き替えである。信長による修理については、註(3)前掲藤岡書に詳しい。また、信長修理時の瓦葺きについては、註(2)前掲堀口論文も参照。

(32) 註(4)参照。

(33) 甲本の内裏については、すでに註(2)前掲堀口論文での検討があり、これも参照する。しかし、堀口論文は短いものであり、土御門内裏全体の検討には及んでいない。

(34) この点は註(2)前掲堀口論文にすでに指摘がある。なお、石田尚豊「洛中洛外図屏風の概観―町田家旧蔵本を中心として―」(「洛中洛外図大観 町田家旧蔵本」小学館、一九八七年)によれば、町田家旧蔵本つまり甲本の左隻の上京の景観は、文明二年(一四七〇)に焼失した相国寺大塔から見た鳥瞰図で、内裏を含む右隻の下京の景観は、「鴨川を隔てて、遠景と近景を対応させながら平行移動」する従来の大和絵鳥瞰図の伝統を継承したものという。

(35) 『康富記』によれば、この門は大番役として管領(焼亡当時は畠山持国)の被官・諸分国人が警固し、当時は左衛門陣といっても朝廷の衛府官が警護するのではなかった。また、唐門(西面北門)・北面西門・東門も武士の「巡役」として警固し、土御門内裏の外郭門はいずれも「武家警固」であった。

(36) 『建内記』応永三十五年(一四二八)正月七日条によれば、この門で検非違使の行事である北陣雑犯が行われており、この門に北陣があつたと考えられる。近藤好和『建内記註釈2』(日本史料研究会、二〇一一年)参照。

(37) 西面北門を「唐門」とする『康富記』の記述が誤記であることは、すでに註(2)前掲堀口論文に指摘がある。本稿ではこれを支持する。しかし、堀口氏はこの門が棟門であることには言及していない。一方、註(3)前掲藤岡書ではこの門を棟門とするが、『康富記』の記述に関しては、「門の位置から見た通称」とし、誤記説を採らない。

(38) 註(2)前掲堀口論文参照。

(39) 応永内裏図には「御湯殿」が二箇所みえるが、御末南の「御湯殿」は御湯殿上であることは、是沢恭三「皇居御湯殿上の間の性格」(『日本学士院紀要』九一三、一九五一年)が考証し、註(3)前掲藤岡書も賛同する。

(40) 現在の仁和寺金堂は、慶長十八年(一六一三)造営の土御門内裏紫宸殿を寛永年間(一六二四～一六四四)に移築したもので、屋根を檜皮葺から瓦葺に変えるなどの変更はあるが全体構造に変更はなく、南階上には階隠の屋根がある。

(41) 甲本では内裏各所に女性の一行を描き、小島道裕氏の示教によれば、甲本の制作事情とも関連し、女性に土御門内裏の概要を知らせる意図があつたのではないかという。なお、『二水記』永正十四年(一一五七)正月十六日条によれば、「近年為三珍重之間、児・女子如雲霞」令「見物了」とあり、その年の踏歌節会は多数の稚児や女性が見物したという。この年に限らず、正月節会には女性等の見物人が多かったのではなからうか。

(42) 『建内記』嘉吉元年(一四四一)四月二日条にも「盗人參昇内侍所(春興殿也)」とみえる。また、『二水記』永正十五年(一一五八)三月四日条によれば、内侍所臨時御神楽で後柏原天皇は春興殿に入御しているし、同永正十七年八月八日条によれば、春興殿の修理が終わって、八咫鏡(内侍所)が帰座している。

(43) 『教言卿記』同年三月八日条に「内裏泉殿被立、日出」とある。

(44) 註(29)前掲別本「御即位庭上之図」。なお、南北朝以来の土御門内裏小御所の構造・機能・変遷等については、註(3)前掲川上書参照。

(45) 本稿では乙本の内裏については割愛したが、たとえば月華門・日華門に相当する部分が門の形態をなしていないなど、まったく正確な描写である。

(46) 『三節会次第』は『群書類従』第七輯(公事部)所収本を使用。『群書類題』によれば、徳川光圀編纂の『礼儀類典』を校本とする。なお、国立歴史民俗博物館所蔵高松家伝来禁裏本にも『三節会次第并雜例 後成恩寺関白抄』の外題(霊元天皇宸筆)で所収(資料番号H-600600-1501)×函14。群書類従本と校合すると両者互いにくつかの写し漏れがみられるが、式次第を追うだけであれば群書類従本でまったく問題はない。なお、高松宮家本の奥書は群書類従本とまったく同文で、その最初に「本云」と傍書する。この「本」は転写元(祖本か)のことと考えられ、写本であることを明示し、群書類従本とは兄弟関係にあるか。

(47) 筆者は『建内記註釈1』(日本史料研究会、二〇〇九)および註(36)前掲『建内記註釈2』で、それぞれ『建内記』応永三十五年(一四二八)正月一日条および同七日条にみえる元日節会と白馬節会を、『三節会次第』などを使用しながら詳細に註解した。以下、土御門内裏での正月節会の詳細については上記註釈参照。また、本章はその成果による。

(48) かかる謝座の作法は、『二水記』永正十四年(一一五七)正月一日条・翌年正月一日条からもわかる。

(49) 註(1)前掲小島書。

(50) 根拠はいずれも『統史愚抄』。

(51) 註(4)前掲黒田書。

(52) 『公卿補任』大永五年。

(53) 土田直鎮「上卿について」(坂本太郎博士還暦記念会編『日本古代史論集下』吉川弘文館、一九六二年、のち『奈良平安時代史研究』(吉川弘文館、一九九二年)

再録。

(54) それぞれ『公卿補任』応永二年・大永六年。

(55) 謝酒の作法は、註(36)前掲『建内記註釈2』・註(47)前掲『建内記註釈1』参照。

(56) 強引に解釈すれば、武官と武士(朝廷と幕府)を混同したのであろうか。武官と武士の混同があったとすれば、土御門内裏が武家警固であった(註(35)参照)ことと関わるか。なお、康暦三年(一二三八)の白馬節会で將軍足利義満が権大納言として外弁上卿を務めた(『後深心院関白記』同年正月七日条)。山田邦明氏の示教によれば、製作者がその時の記憶を具現化したのではないかという。

【付記】 本稿の内容は、二〇一二年五月に名古屋中世史研究会例会で報告した。席上、貴重なご意見を賜った諸氏に謝意を表す。また、図6・8の各原本の所蔵先での架蔵番号・勅封番号については、小倉慈司氏の教示を得た。明記して学恩に謝する次第である。

(国立歴史民俗博物館客員教員)

(二〇一二年四月一〇日受付、二〇一二年八月二三日審査終了)

The Imperial Palace and its Events as Seen in the Rekihaku Kohon “Folding Screens of Scenes In and Around Kyoto”

KONDO Yoshikazu

Screens five and six of the Rekihaku Kohon “Folding Screens of Scenes In and Around Kyoto” (hereinafter referred to as “Kohon”), which are owned by the National Museum of Japanese History and whose production recent research has clarified to date from 1525, show the Imperial Palace of the time – the Imperial Palace of Emperor Tsuchimikado – and, standing before the hall for state ceremonies, a young man thought to be a court noble dressed in full sokutai ceremonial court dress. This suggests the scene of some kinds of events.

Screens five and six of the “Folding Screens of Scenes In and Around Kyoto” show scenes from New Year to February, and there is no doubt that screen five depicts New Year events. Up until now, however, there had been no research conducted into what these events were, and there had been hardly any research conducted into the Imperial Palace of Kohon itself.

Therefore, this paper has performed detailed analysis of three factors – namely the sokutai ceremonial court dress worn by the man depicted, his position within the Imperial Palace, and the fact that he stands alone – according a dedicated chapter to each of these factors, and has made an inquiry into the notion that the New Year events of the Kohon depict the scene of a New Year seasonal court banquet (and in particular, a seasonal court banquet held on New Year's Day) for an Naiben Shaza. Accordingly, we attempted a detailed examination and comparison of the buildings and facilities drawn in the Imperial Palace of the Kohon, identified from books and instructions as being the Imperial Palace of Emperor Tsuchimikado, as well as the buildings and facilities of the Imperial Palace depicted in the Tohaku reproduction /Uesugi-bon, which are bundled together with the same early “Folding Screens of Scenes In and Around Kyoto” as the Kohon.

Key words: Folding Screens of Scenes In and Around Kyoto, sokutai ceremonial court dress, Imperial Palace of Emperor Tsuchimikado, New Year seasonal court banquet

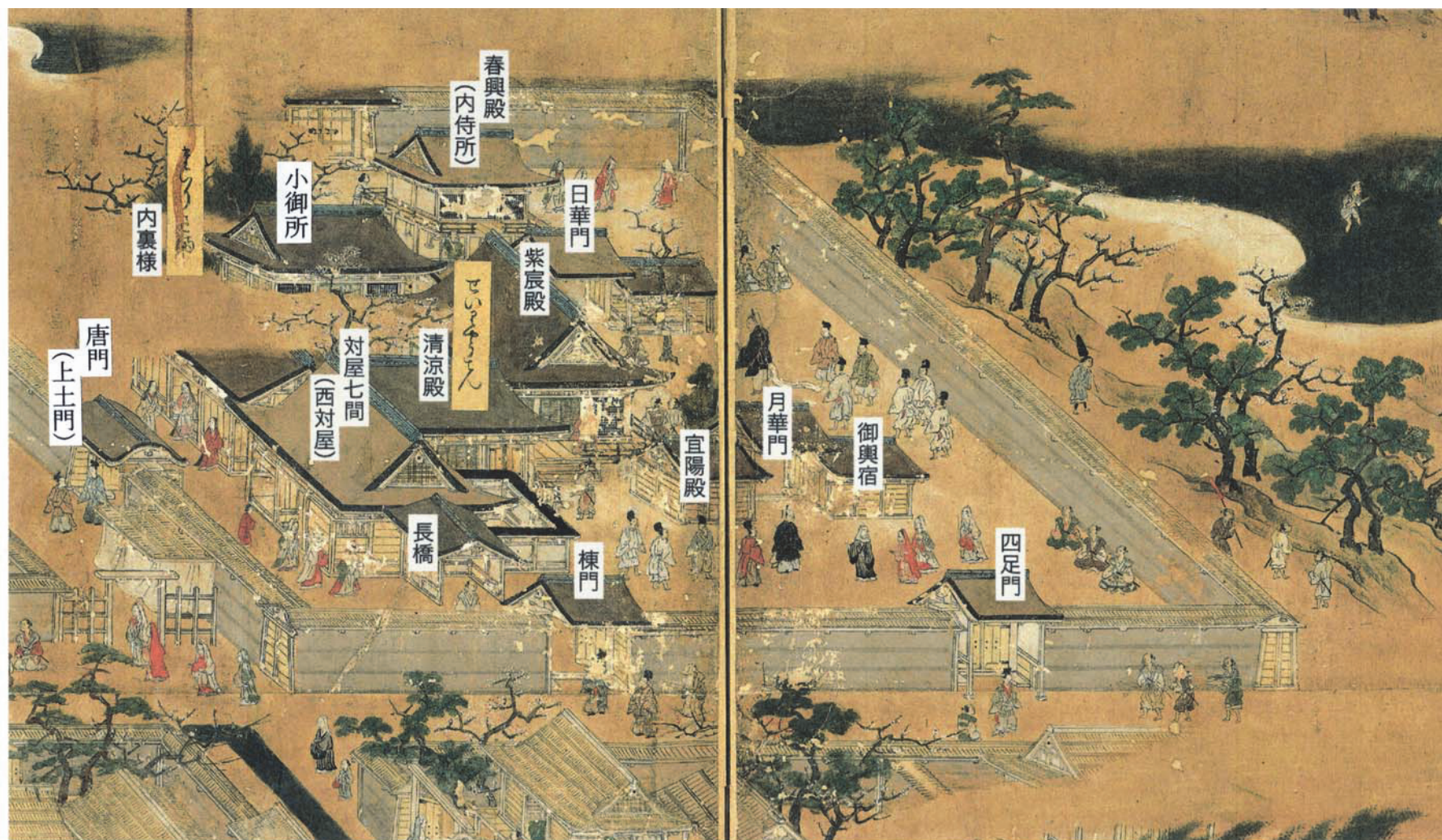


図1 甲本にみえる内裏 『洛中洛外図屏風』 歴博甲本 (部分・一部加筆) 国立歴史民俗博物館蔵

